

実習報告（基盤教育実習）

生徒の持つ個性を受容しながら多様な価値観と出会う鑑賞指導の授業開発 —ユニバーサルデザインを取り入れた支援の考察—

大橋 寧々（授業実践探究コース）

【探究実習のテーマと設定の理由】

中学校の音楽科の授業で学習する生徒達は、小学校で受けた音楽の授業・日常の中の音楽との関わり方・音楽に対して持っている価値観など、それらを「個性」として見ると様々である事がわかる。また、これにより音楽科の授業を行う際には、聴き方や感受の仕方・持っている知識・技能などに差が生じている。そのため、音楽科の授業に対して、「楽譜が読めないから、発言に自信が持てない」「聴くのは好きだけど、表現するのは恥ずかしい」というような、「音楽は、音楽に精通している人がするもの」というバイアスや心理的ハードルが生まれている。これらのバイアスや心理的なハードルが、今回の研究内容で示す音楽科の授業における課題点である。このような「個性」によって引き起こされる理由や場面を具体的に明らかにし、更にそれに沿って、ユニバーサルデザインの観点からの支援を行う。文部科学省の中学校学習指導要領、音楽科の目標には「表現や鑑賞といった幅広い活動」を通じて生徒が他者と協働しながら活動を行うこと、と示されている。この音楽科の幅広い活動によって、生徒達は音楽の豊かさを知り、音楽の多様性について理解しながら、生徒一人一人の個性や興味関心を生かしていくことが目標の一つとして挙げられているのである。これらを踏まえ、特にこの研究では、鑑賞の授業の中で行われる「知覚・感受」の場面で、「生徒の個性による違い」がよく表れるのではないかと仮説を立て、知覚・感受を繰り返す中で自己の価値観の変化を感じることで、また、他者との活動を通じて新たな価値観の形成することを目指して、授業開発を行っていく。

このような研究テーマから、今回の探究実習では、音楽科の学習が行われるうえで、実際の学校現場では生徒達はどのように音楽と関わりながら学習を行っているのか、実習校（佐賀市内の中規模公立中学校）よりご協力をいただきながら、授業参観や実践を通して生徒たちの実態調査を行っていく。また、音楽科の学習の中で行われる「他者と協力し合いながら行う活動の場面」では、生徒自らがどのようにして自己を調整したり、感受した事を他者に共有したりしているのか、他者と共に音楽をつくる姿などにも着目して、音楽の授業が行われる中での「生徒同士の関わり合い」の実態も調査する。

また、令和3年の中央教育審議会の答申が示す「個別最適な学び」では、「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されている。その中でも「指導の個別化」を見ていくと、子ども一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法、教材や学習時間などの柔軟な提供・設定を行うことが示されている。これらを踏まえ、教師の支援の実態として個々の生徒に合った効果的な支援はどのような手立てで行われているかも観察する。

【探究実習の研究目標】

- ①音楽科の授業内での、実習校の生徒の現状を知る。
- ②現状を知ったうえで、多様性を理解した「幅広い学習活動」を行うためには、授業中にどのような課題が生まれているか、生徒を観察する。
- ③生徒が音楽を通じて友達とどのような関わりが生まれているか、観察する。

【探究実習の概要】

	実習日程	主な実習内容
9 月 中	2021年10日(金), 13日(月)~17日(金), 21日(火), 22日(水), 24日(金), 27日(月)の日程で10日で行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・10月29日の合唱コンクールに向け, 合唱曲の練習。 ・授業参観, 実践。
10 月 以 降	毎週火曜日 残り10日間実習を行う。 (火曜日の他, 伴奏をするクラスの授業とリハーサルのある時間にプラスで参加する。)	<ul style="list-style-type: none"> ・合唱指導, 器楽, 鑑賞を行う。 ・授業参観, 実践。 ・学活ノートや自習学習ノート, 授業ノートのチェック, 給食指導等, 音楽の授業以外の担任業務も関わらせてもらった。

【探究実習の成果と課題】

探究実習の研究目標より,

①本実習では, 合唱・リコーダー・鑑賞といった, ほぼ全ての分野の授業を参観し, 授業実践をさせていただいた。その中で, 生徒はどの授業にも楽しみながら参加している姿を見る事ができた。特に鑑賞が興味深く, 知覚・感受を働かせようとしながら学習を行っている様子が見られた。教師の手立てにおいても, 一つの楽曲に対し様々な形態で演奏される曲を鑑賞させ, 多様な音楽に触れる時間であるところに, 鑑賞の学習の面白さがあると勉強になった。これを踏まえ, 来年度の実習では鑑賞分野に着目して授業実践を行っていきたいという成果を得た。

②生徒の様子を見ていて感じた事は, やはり今までの音楽経験や持っている知識・技能に個人差がある事である。過去に受けた音楽の授業や, 部活動・習い事により音楽経験の多い生徒も居れば, 楽器に触れる機会が少ない・人の前で表現をするという行為に慣れていない, というような生徒も居た。授業内で, 生徒が音楽を楽しむことが阻害される場面というものは, 「各々の持つ経験や能力の差」が現れる場面なのではないかと考察することができる。また, 課題として, 授業実践を行う前に, どのような音楽経験があるのか, 今どのように音楽と関わりを持っているかを調査する必要があると感じた。

③鑑賞の活動の中で言語活動が行われていたが, 多様な音楽を聴くことで様々な価値観に触れる経験により, 自分を表現する力・他者を受容できる人間性を育まれていくのではないかと感じた。しかし, 先ほど述べたような経験や能力の個人差を無くし, フラットな状態でどのような生徒も参加できる授業を行うために, 「ユニバーサルデザイン」の視点を取り入れたいと考えた。

また, 生徒の中には何らかの特性を持った特別支援学級の生徒も出席するクラスもあったが, 頁数を聞き逃したり, 今やるべき事を見失ってしまったりする場面もあった。しかし, 教師の働きかけや周りの生徒が伝えたりする事でカバーする場面も多かった。

成果と課題を踏まえ, 音楽学習を他者と共に行う上で, クラス内受容的な風土を育てる事は大切な事なのではないかという成果と課題を得た。これらを活用して, 次年度の実習をより良いものにしていきたい。

【引用・参考文献】

- ・文部科学省(2018)「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編」。
- ・中央教育審議会(2021)『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す.個別最適な学びと協働的な学びの実現』答申。
- ・吉田秀文(2011)「音楽学習における動機付けと持続性に関する一研究—自己調整学習の研究成果を踏まえて—」群馬大学教育学部紀要芸術・美術・体育・生活科学編 46:13-19